

3 パルボウイルス B19によるウイルス関連血球 貧食症候群 (VAHS) を合併した全身性エリ テマトーデスの1例

吉川 成一・菊地 博 (新潟市民病院)
菊池 正俊・吉田 和清 (腎膠原病科)
高井 和江・真田 雅好 (同 血液科)
渋谷 倫子・佐藤 信輔 (同 皮膚科)

症例は34才女性。平成5年頃より関節痛が出没し、某病院で全身性エリテマトーデス (SLE) が疑われた。平成7年10月、当科に紹介され SLE の疑いで経過観察中であった。平成12年8月より顔面紅斑、発熱、関節痛が出現し、9月5日当科に入院した。白血球減少、抗核抗体陽性、抗 DNA 抗体 164 IU/ml、抗 SS-A 抗体陽性、抗 SS-B 抗体陽性などより、SLE、シェーグレン症候群と診断され、プレドニゾロン 40 mg/日を開始した。一旦解熱し、関節痛も改善したが、2週目より高熱、紅斑、血小板減少が出現した。血中 LDH、フェリチンの上昇があり、骨髄で血球貪食像を認めた。さらに、PCR 法でパルボウイルス B19の DNA が検出され、同ウイルスによる血球貪食症候群が疑われた。ステロイドセミパルス療法、VP-16間欠投与により臨床所見は改善した。

【結語】発熱、紅斑、血球減少は SLE の増悪を疑わせるが、本例のように、血球貪食症候群にも留意する必要がある。

特別講演

「エリテマトーデスの皮膚病変」

埼玉医科大学皮膚科学講座
土田 哲也

第30回新潟高血圧談話会

日時 平成12年12月1日(金)
午後6時30分
会場 新潟大学医学部
有壬記念館 2階 大ホール

一般演題

1 β アドレナリン受容体遺伝子多型と自由行動 下血圧、特に夜間降圧度と早朝昇圧度との関連

山崎 肇 (長岡赤十字病院 内科)
山崎 肇・渡辺 資夫
成田 一衛・後藤 眞
齋藤 徳子・白崎 有正 (新潟大学 第二内科)
下条 文武

【目的】交感神経系は、末梢血管抵抗、心機能、レニン放出、腎臓でのナトリウム再吸収などに影響を与え、血圧調節に大きな役割を果たしている。カテコールアミン受容体である β アドレナリン受容体は、全身に広く分布し血圧調節の一部にも関与していることが報告されている。また夜間降圧の障害は臓器障害のリスクファクターであることが知られているが、夜間降圧度には個人差が見られ、遺伝的素因の関与が想定されている。今回我々は、 β アドレナリン受容体遺伝子多型が夜間降圧および早朝昇圧の規定因子の一つであると仮定し、その関連性について検討した。

【方法】新潟大学第二内科入院中に自由行動下血圧測定が施行された症例で、クレアチニークリアランスが 30 ml/min 以上の患者 (n=73) を対象とした。 β_1 アドレナリン受容体多型は Ser 49 Gly, Arg 389 Gly の2種類、 β_2 アドレナリン受容体多型は Arg 16 Gly, Gln 27 Glu, Thr 164 Ile, C-47→T, T-20→C の5種類、 β_3 アドレナリン受容体多型は Trp 64 Arg の1種類をオリゴヌクレオチドハイブリダイゼーション法で決定した。夜間降圧度は、昼間収縮期血圧に対する夜間血圧の低下度を%で表し、早朝昇圧度は起床後早朝血